

### スクールカウンセラーからのお便り

近年は、マスメディアを通して、国内外を問わず、かつて予期しなかったような地球規模の自然大災害や、人権に関する予測を越えたさまざまな問題が連日のように報道されます。もう少し内容について詳しく知りたくて、一度でも検索すれば、その後、ものすごい量の情報が真偽不明のまま入ってきます。

ふと、我に返ると、今度は我が子のことが気になってしまう。「今、親（保護者）として何をすべきか。何を伝えるべきか」と、また携帯電話片手に検索してしまう。——そんなことはありませんか？

ところで、子どもはいつの時代でも存在していたはずで、子育てで悩むとき、「過去」から学べることもたくさんあります。「過去」から「今」を生きるヒントを探すのもいいかもしれません。

#### ヨーロッパでは、中世（おおよそ日本の鎌倉時代から戦国時代）まで、子どもはいなかった？

○1960年フランスの歴史学者フィリップ・アリエス（1914-1984）は書物「子供の誕生」の中で、



- ・中世までは、「子ども」という概念も「教育」という概念も存在しなかった。
- ・7～8歳以前の子どもは、動物と同じ扱い。死なせても罪に問われなかった。
- ・「子ども」を人間として教育すべきと考えられたのは17世紀（日本の江戸時代）以降のことと記している。

#### 子どもを「小さい大人」として見る、扱うのではなく、まず、ちゃんと観察しよう

○18世紀「人間不平等起源論」などで知られる哲学者ジャン=ジャック・ルソー（1712～1778）は、自らの哲学・宗教・教育・道徳・社会観の一切を盛りこんだ著書「エミール」を刊行した。

・「エミール」には、「人間は生まれたときは、善も悪も知らない無垢な存在である。その後の周囲の環境に影響を受ける。」とし、幼少期に、特に母なる人が寄り添い教育をする意義を記した。

◎知識より先に、自然環境下での体験や経験から「五感（視・聴・触・味・嗅）を鍛えよう」

◎泣いてもしばらく静観するなどして、冷静さを保ち、子どもには安易に支配されないこと。

◎「愛情」とは、毅然とした態度が示せることである。

◎失敗しても安易に謝らせることを要求せず、子ども自らが「反省する言動」ができることを待つ。

◎子どもには、知らないことは「知らない」と言える素直さが大切。

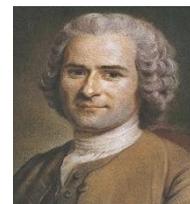
◎幼いときから急いで多くの知識を無理矢理教え込もうとする「促成栽培」はよくない。

◎身体の感覚や運動能力が十分に発達すると、それを土台にして知性が発達してくるのだから、最初の時期はとくにゆっくりと待ったほうがいい。

◎就学後、字が読めるようになれば、しっかり、本を読ませる。……

★現代では、子どもには発達段階というものがあることは常識。

でも、この当時のフランスでは子どもは「小さい大人」としか見られていなかった。貴族やブルジョワの富裕層のあいだで「優れた教育」といえば、古典を大人顔負けに暗唱させるようなこと。しかし、ルソーは「子どもの発達には段階があり、それぞれに応じたふさわしい教育があるはずだ」と唱えた。ルソーはそういう考え方を述べた思想家であった。



ルソーは、「子どもの発見」者といわれ、「エミール」は、教育学の名著とされている。

（『エミール』今野一雄訳、岩波文庫、上・中・下巻 参照）

（『100分で名著 ルソー エミール』西研 NHK出版 参照）

長く続いているもの/ことや、読み継がれている本、名曲といわれる音楽、懐かしい食べ物などには、気持ちの余裕を感じさせてくれるさまざまなメッセージが潜んでいる可能性があります。

困ったときや疲れた時には、温かさのある優しい刺激を自らの「五感」に与えてあげましょうね。そして、ゆっくり深呼吸できれば、たとえつかの間でも、ホッと、気持ちが楽になると思います。気になることがありましたら、学校にお問い合わせください。 [文：S. C. 五百蔵 佳世子]